



県出身コンビが活躍 甲子園

光星 福山選手と下山選手

甲子園出場を果たした八学光星は、118人の部員数を誇る。わずか20人のベンチ入りメンバーの中で本県出身者が2人いる。1人は八回途中まで4安打3失点と力投した3年福山優希投手(八戸市市川中出) 写真①で、もう1人は決勝の大舞台で本塁打を放った2年下山昂大三塁手(弘前四中出) 写真②だ。「次は甲子園でエースらしい投球をしたい」「福山)、憧れの舞台で活躍したい」「(下山)と2人はそれぞれ意欲を語った。

【本記1面】

福山は小学5年の夏から「追っかけ並みに光星の試合や練習を見に行っていた」という。2012年の甲子園準優勝投手で兄の友人でもあった金沢湧紀投手の活躍を見て、光星への思いを強くした。入学当初は守備が下手だという理由で投手を選んだものの、2年の春からは主戦として定着した。昨夏は決勝で青森山田に敗退。仲井宗基監督から「お前は気持ち弱いな」と言われ、体力づくりと並行して、気迫を前面に打ち出した投球を心掛け、優勝をつかんだ。もう1人、下山は兄の影響で幼少期に野球を始め「強豪校で自分の力を試したかった」と、弘前から八戸へ。今年の東北大会前の練習試合中に左中指を骨折し、ベンチから応援してきた。悔しさをバネにトレーニングや練習に没頭。レギュラーの座を勝ち取った。決勝には両親がスタンド応援に駆けつけた。父卓哉さん(50)は「甲子園出場は親子の夢だった。地元で本塁打を打って良かった」と話した。母幸子さん(48)はこの日が誕生日。「甲子園のキップをプレゼントする」この約束が果たされ、幸子さんは「最高のプレゼント」と大喜びだった。(本紙取材班)